

スタッフルーム
Staff room

切ない火災体験と図書館防災

わたなべありさ
渡辺阿利紗

(メディアセンター本部)

私は、自宅が火事になりかけたことがある。恥ずかしい話であるのだが、意を決し、その体験をお伝えしたい。

大学卒業後、ある会社への入社と同時に遠方配属となり、新天地で一人暮らしを始めた。数か月が経った頃、自身に交際相手が出来た。今思うと、不安が残る新しい環境の中で初めてできた親しい人の存在に浮かれていたのだろう。私は彼を家に招いて慣れない料理を振る舞うことを考えた。それも作ったこともない揚げ物・カニクリームコロッケを作ることにした。手頃な鍋を持っていなかった私は、直径15センチ程の小鍋を買い、そこに油をたっぷり注いでコンロの火にかけた。何分経ったのかは覚えていないが、あるタイミングで鍋の外周が小さく燃え始めた。よく見ると、私は新品の鍋に貼り付けられている商品説明の紙をつけたまま、火にかけていた。間もなくして燃えた紙と火の欠片が、鍋に入った瞬間、鍋の中から火が昇った。慌てた私は咄嗟にガスの火を消した。そして、あろうことか、火の出る鍋の取っ手を持ち、水道の水を流し込んでしまった。燃える油に水が入ったその瞬間だった。激しい音を立てながら油が爆ぜ、天井に届くほどの高い炎が燃え上がった。飛び散る油で手が多少火傷をしてしまったが、鍋が小さかったこともあり、幸いにも他所に火が移る前に鎮火することができた。しばらく呆然としたあとに、上を見ると、炭で黒くなった天井があった。そして、右を見ると、離れたところで腰を抜かしている彼がいた。なんとも切ない夜だった。

「燃える油に水は危険」という常識を聞いたことはあったはずなのだが、いざという場面で失念し、誤った行動をとってしまった。その結果、勢いよく燃え上がった赤い炎の恐怖は今も忘れられない。

さて、ここでようやく図書館の話になるのだが、私は現在、事務嘱託としてメディアセンターに勤務して3年目になる。例えば、貴重な資料を多く所蔵する図書館で、ひとたび火災が起これば被害は多大なものになると予想できる。そこでこれから、図書館の火災について考えてみたい。

過去に火災によって損害を受けた図書館として以下の事例がある。

- ・1971年、オックスフォード（英国）のラドクリフ病院で、配線の老朽化が原因で火災が発生し、世界で最も優れた医学関係貴重書図書館の1つが完全に崩壊してしまった。
- ・1986年、ロサンゼルス市立中央図書館で、放火により2度、火災が発生し、40万冊の書籍が消失、さらに125万冊に煙と水の被害が及んだ。¹⁾

年代としては古い事例を挙げたが、火災により、これだけの有名・無名の至宝が失われた損害は取り返しのつかないものだ。国内の図書館でも昨年、落雷による火災があり、放水で本が濡れるなどして火災直後、3万冊の廃棄が見込まれる被害となった（その後、約1万冊修復）。火災の脅威を再確認するとともに防火対策の重要性を認識させられる。

三田メディアセンターでは、慶應義塾の防災規程並びに防災計画に基づき防火管理を行い（防火に限定せず防災対策に取り組んでいるがここでは省略する）、自衛消防班の編成や、消火設備の整備、日常の火災予防についての取り決めを定めている。

図書館の防災の目的として、“人命の安全、文書・図書の保全、図書館及び図書館の機能の維持”の3点が挙げられる²⁾。蔵書を守り、利用可能な状態に保つことはあらゆる職員の責務といえる。

一般的に図書館には火元が無く、火災になる確率が低いため、つい危機感が薄くなってしまいがちだが、自身の体験を踏まえ、火災は忘れたころにやってくると痛感するので、油断せずに、防火意識を頭の片隅に持ち続けたいものだ。

注

- 1) サリー・ブキャナン。“はじめに”。図書館、文書館における災害対策。安江明夫監修。小林昌樹ほか訳。日本図書館協会、1998、p.14。
- 2) 小川雄二郎。“文書館・図書館の防災対策”。図書館・文書館の防災対策。雄松堂出版、1996、p.17。